

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

にたずさわって 25 年、これまた私にとって彩鮮で、まさしく眼からウロコのぬけ落ちる思いのなまなましい体験であったことを、ここで報告しておきたい。

5) そのほか、各方面に単独で、あるいは共同の形で名を連ねた研究報告は、書き散らした雑文をも含めて、この 1 年の研究活動の歩みのあとづけとしてそれぞれに、私なりに大切であるが、そのすべてをここであげることはさし控えたい。ただ私が長くそこに職を奉じた名古屋

大学教養部において、鈴木達也教授の停年退官にあたり同教授の手によって編まれた、52 年 3 月、福村出版刊の「心理学ゼミナール」の中に、誘いをうけて、「投映の世界」と題する章を担当し、人間接近への新しい方向づけをここでも提起したことだけをつけ加えておきたい。先学鈴木教授への学恩に、いささかたりとも酬いることができればとの思いからである。

(昭和 52 年 7 月 31 日)

## 研究経過報告－2 年目－

村上 隆

本年も昨年同様、応募の際提出した“研究経過と研究計画”に則して述べる。いつまでもこれにこだわっているのも進歩のない話なので、こういう書き方は本年限りにしよう。3 つの関心領域について順に述べる。

### (1) 心理学における測定の論理

昨年の予告通り、difference scaling における、解の一意性について明らかにすることを課題とした。まだ不十分な点も多いが、本紀要の論文“順序距離尺度の数値的表現と一意性特性について”にその結果はまとめられている。当初のアイディアとはかなり異なった道筋を経ることになったが、一応の目標は達成したと考えている。なお不明な点についての検討を続けるとともに、本文中で述べた conjoint measurement への拡張を通じて、より有用なデータ分析のモデルとしてゆくことを本年の課題したい。

(2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討 明度尺度に関する実験を継続した。今回は、上記の一意性の問題の検討に資るために、条件を縮小し、一定の反射率の背景上において、明度差を反復測定するという実験計画をとった。この結果については、本年の日本心理学会第 41 回大会で発表される。なお、この実験は、

1 名の被験者について、1 日 1 時間ずつ、20 日間を要した。尺度構成法として実用的なものにしてゆくには、この所用時間を減らす工夫に加えて、ほぼ同等の結果を得られるような、より直接的で簡単な実験法を見出す必要がある。この項については、これが本年の課題。

### (3) 多次元解析的手法

本学大学院の後藤宗理、辻本英夫両氏とともに、三相データの分析法について、研究（というより現在のところは学習というべきか）を開始した。この分野で開発された手法の幾つかのプログラミングと、手持ちのデータへの適用という形で現在のところは進めている。その一部は、本年の行動計量学会第 5 回大会で発表される。今後は、問題領域と、データの性質に合わせた、手法の分類と開発にまで進みたいと考えている。なお、項目分析のためのクラスター分析の単純な一方法についての検討を個人研究として行ったが、本紀要では発表に至らなかった。

これも含めて、昨年この欄で予告した 2 つの論文は、いずれも完成させることができなかった。結局、時間の上手な使い方、というのが最大の課題であろうか。

## この一年間の研究経過

蔭山 英順

私の研究活動の大部分の時間は自閉児の遊戯治療の実践活動で費されている。本年度は年少の自閉傾向を持つ幼児、特に 2 歳代から経過を見ることのできたケースをインテンシブに見てきている。こうした早期に発見し、治療的援助をしながら経過を見てみると、3 歳代に入って、興味限局及び同一性保持傾向を顕著に示すケースと自閉傾向を軽減していくケースの存在を確認した。そう

した経過を規定していく要因に関して、自閉傾向を形成していく成因論の関心から現在検討中である。

さらに、従来の研究の継続として、自閉児の学校教育の研究を協同研究として展開してきた。本年度は本紀要に発表したように、情緒障害児学級における授業分析を通して、自閉児の指導方法の問題にアプローチした。こうした研究活動を通して、さらに、現場教師との深い連